地域の元気

天栄村

「日本一の米」守り通す

ドキュメンタリー映画「天に栄える村」（原村政樹監督）は、東京電力福島第1原発事故に見舞われながらも「日本一の米」を守り通した農村の物語だ。中心人物、天栄村の産業振興課長、吉成邦市さん（54）は「大丈夫だと思うしかなかった」と格闘の日々を振り返った。【藤原章生】

吉成邦市課長

――事故直後、役場に集まった農家の人たちが黙り込む印象的なシーンがあります。

原発から70キロ以上離れているからと安心していたら、風向きの影響で放射線量が高くなっていました。野菜から1キロ当たり2000ベクレルも出て土もやられた。近くの有機キャベツ農家の人が自殺し「どうすっぺ」と沈み込んでいた時でした。

――それでも誰も取り乱さない。農家の男性たちの表情が深くて、いいですね。

怒りより胸を押しつぶされた感じです。一番気力のある村民が役場に来て「俺、頭おかしくなっちゃうよ」と。私は「何とかするから大丈夫」と言うしかなかった。それで国や県の補償など何もない時に、薬品や藁で土からセシウムを吸い取る何十種もの実験を「天栄米栽培研究会」の仲間20人と始めました。

――原発事故を扱った他の作品は主に震災後の映像が中心ですが、「天に栄える村」はその4年前から撮っています。

別の撮影で村に来た原村監督がたまたま我々の活動も撮ってくれていたんです。村長に頼んで公用車の更新代400万円を耕作放棄地の購入に回し、そこを漢方薬で改良したらおいしい米がとれた。費用がかかり米の売値を1キロ1000円と高くしてデパートに出してもなかなか売れませんでしたが、全国コンクールで賞をもらい、震災前は注文が殺到していたんです。

――今は？

2011年産は売るのに1年半かかりましたが、12年産は料亭やデパートがまた買ってくれるようになりました。風評という言葉は使いたくないんです。お客さんが悪いみたいですから。誰だって放射能があれば食べたくないでしょ。今はほぼゼロですが、当初、土が汚染されたのは風評でなく、明らかに原発事故による実害です。

――生まれ育った村にこだわるのは？

18歳で村を出て、東京の大学を卒業する時、身内には戻らなくていいと言われましたが、村を何とかしたいという思いがあって。ここでしか生きられないんだから、良い村にしようと頑張れたんです。震災後、みな自腹を切って除染したのは、ここを決して離れない村民の覚悟があったからなんです。

放射線量を調べるため水路の水をくみ上げ、持ち帰る天栄村の人たち＝映画「天に栄える村」の一場面（桜映画社提供）

天栄米栽培研究会

県中部、人口6000人 湯の里でも有名

天栄村は人口約6000人。県中部の山あいにあり、二岐温泉など湯の里としても知られる。ブランド米「天栄米」の他、地熱利用のレタス栽培、長ネギ、南米原産の根菜ヤーコンなどが名産。

映画「天に栄える村」（106分、桜映画社）は村民の取り組みや、人々の力強さを淡々と追う。村在住の漫画家、山本おさむさんは推薦文で「人々の生きるための努力は、泣きも叫びもせずこのように黙々と積み重ねられたのだ。その涙ぐましい人間の姿を悲劇に転嫁することなく、静かな共感をもって描き出している」と記している。

上映は19日～11月1日、福島市の「フォーラム福島」（☎024・533・1717）で。